

### 3. 1 北海道の活動報告

#### 特定非営利活動法人 北海道ふるさと回帰支援センター

##### 1. 事業概要

###### (1) 事業の目的

東日本大震災被災地一次産業従事者及び、首都圏避難者の雇用創出

福島県を中心とする多くの避難者は、いつ帰れるかわからず、避難生活も長期化し仕事も見つからず様々なストレス下におかれている。失業率が高く不況の風が吹く北海道の現状の中で、農業に関心を持っている避難者の方々に少しでも意欲を保ち続けてもらいながら、就農・就業につながること及び生活相談と寄り添い活動を目的に下記の事業を行うこととした。

- ①避難者のニーズの方向性を見極め、かつ就農の可能性を探るため、3タイプの農家を訪問し実地研修を行うこととし、併せて就農就業アドバイスを行う。
- ②就農希望の避難者だけではなく、避難者全体を対象に生活に寄り添う相談活動を行う。

###### (2) 実施体制、他団体との連携、他地域との連携状況

実施体制は、非営利活動法人北海道ふるさと回帰支援センター被災者支援班と、上記①は北海道NPO被災者支援ネット及び北海道避難者アシスト協議会との連携で実施した。②の相談事業は「うけいれ隊」との連携で実施した。

###### (3) 事業の実施内容

###### ①就農研修事業

第一回「JGAP認証農園余湖農園就農促進研修」

(目的)

震災及び原発事故から1年数か月が過ぎ、なかなか雇用に結びつかない状況が見受けられる。そこで、今回北海道の主要な産業である農業に就くことを希望・考えておられる避難者の方々に有益な判断材料となるよう本研修を企画した。

今回は札幌近郊にあるハウス栽培を中心とした余湖農園を訪問し受講・見学・収穫をすることによって就農に対するより深い理解を得、今後の職業選択の際、判断の一助とした。

(対象者)

東日本大震災避難者で就農を希望される方・お考えの方。特に野菜のハウス栽培に興味のある方。

(事業行程)

9時00分	J R 札幌駅北口出発
9時30分	J R 新札幌駅周辺経由
10時00分	余湖農園到着
10時00分	講義Ⅰ 北海道農業全般・ハウス栽培について
11時00分	講義Ⅱ 余湖農園の取り組み
12時00分	農場見学・野菜収穫後、
13時30分	昼食会（ディスカッションを行ないながら）
14時30分	余湖農園出発（J R 新札幌駅周辺経由）
16時00分	J R 札幌駅北口 到着

(事業当該施設概要)

農園名：余湖農園（恵庭市稲栄323番地）

札幌近郊に位置する恵庭市は、温暖な気候・風土で、農地に適した平地が多い地域。

余湖農園は「安心・安全な野菜を栽培してほしい」との消費者の声に応じて有機・減農薬栽培に取り組み JGAP 認証を得ている。

経営面積は、東京ドームのおよそ11倍である55ha。

※JGAP 認証は、食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる認証である。

明確な基準：農林水産省が導入を推奨する「農業生産工程管理手法」の一つ  
食の安全確保：農薬の管理や、肥料の管理の徹底。

環境への配慮：環境保全に係る農作業の注意点。水や土壌の保全

(実施日) 平成24年7月7日

(参加者) 21名

## 第二回「富良野近郊メロン農家・豊頃町アグリサポートセンター就農促進研修」

(目的)

震災及び原発事故から1年数か月が過ぎた。これから仕事に就くにあたり、農業を選択肢の一つとして考えたい避難者も相当数いると思われる。北海道へ来た一時避難者は主に札幌圏に集中しており、そこで今回は主に十勝方面で講習を実施することで、北海道の札幌圏以外の地域で実際に行われている農業を見学し、今後定住を含めて考える際、有益な判断材料となるよう本講習を企画した。

今回は3つの講習を企画した。

一つ目はメロン農家に向かう際、バス内で北海道全体の農業についての説明を行い、眼下に広がる畑についての説明を交えながら北海道農業の概要を学習してもらう。(チラシ発行後に追加されたバス内で行う講習)

二つ目は中富良野町にあるメロン栽培を中心とした寺坂農園を訪問し受講・見学することによって、この地域の農業を実際に肌で感じ、具体的な取り組みなどを聞き、自分の持っているイメージをより現実的なものにしてもらうことを目的とする。(就農講習Ⅰ)

三つ目は豊頃町にあるアグリサポートセンターで座学講習を受ける。全国に占める北海道産農作物の割合等統計データ等から、北海道農業の位置づけを知ってもらい、行政機関の取り組みについての概略も同時に学習してもらう。(就農講習Ⅱ)

様々な視点から北海道農業を考察し学習する事によって、北海道での就農が本人にとって妥当性の高い選択肢になり得るか判断する際の一助になればとした。

(対象者)

東日本大震災避難者で就農を希望される方・お考えの方。

(事業行程)

8月11日(土)

10:00 JR札幌駅北口集合(鐘の広場前)

10:30 札幌駅北口出発 ※チラシ発行後に追加されたバス内で行う講習を追加

13:00 富良野近郊メロン農家到着 就農講習Ⅰ

15:00 富良野近郊メロン農家出発

18:00 豊頃町アグリサポートセンター到着  
十勝ロイヤルホテル宿泊

8月12日(日)

9:45 十勝ロイヤルホテル出発

10:00 豊頃町アグリサポートセンター着 就農講習Ⅱ

13:00 豊頃町出発

17:00 JR札幌駅北口着 解散

(実施日) 平成24年8月11日—12日

(参加者) 23名

第三回「余市ハル農園・余市テラス 就農促進・関連産業研修」

(目的)

震災及び原発事故から1年6か月が過ぎ、なかなか雇用に結びつかない状況が見受けられる。そこで、今回北海道の主要な産業である農業及び関連産業に就くことを希望・考えておられる避難者の方々に有益な判断材料となるよう本研修を企画した。

今回は果樹園と地元農業と結びつきのある飲食店で研修を行う。余市ハル農園

と余市テラスを訪問し受講・見学をして就農に対するより深い理解を得、今後の職業選択の際、判断の一助とした。

(対象者)

東日本大震災避難者で就農を希望される方・お考えの方。

(事業行程)

- 9時30分 JR札幌駅北口集合・出発
- 10時00分 講義Ⅰ『北海道の農業・農業行政について』（バス内)
- 11時00分 余市テラス到着
- 11時00分 講義Ⅱ『コミュニティレストラン～新しい仕事場作りについて』
- 12時30分 余市ハル農園へ移動
- 13時00分 余市ハル農園到着
- 13時00分 講義Ⅲ『新しい農業の形～エコビレッジ推進プロジェクトの取り組みについて』
- 15時00分 余市ハル農園出発
- 16時30分 JR札幌駅北口到着・解散

(事業当該施設概要)

余市ハル農園（住所 余市町登町 1863）

特定非営利活動法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトが2012年から管理する農園。コストをできるだけかけずに運営するため、特徴ある取り組みをしている団体。

余市テラス（住所 余市町黒川町 10 丁目 3-27）

地元の食材を使ったコミュニティ・レストラン。地元の農業と深く関わる飲食店で、協働型店舗運営などの講座を定期的に行っている。

(実施日) 平成24年10月7日

(参加者) 13名

(特徴) 札幌近郊で新規就農した若い女性の果樹農家で農作業を行い、就農の現実を体験した。併せて札幌から移住し余市町市内に開業したコミュニティ・レストランを訪問し、地域での役割や創業時の問題点をヒヤリングし、農業関連事業としての飲食店のイメージを肉付けした。

②避難者全体を対象に生活に寄り添う相談活動を行う。

(相談業務)

活動期間：平成24年7月23日～平成24年12月31日

活動内容：活動は大きく2つに分けられる。

- A. 被災地から避難して間がない家族が、安心安全な生活を確立するための支援活動（物資提供支援活動）
- B. 避難後時間が経過しても解決しない、心の問題・孤立の問題・経済的な問題解決に向けての活動（生活相談支援活動・子ども支援活動・家族支援活動・起業家支援活動）

上記活動のうち、相談業務に該当する活動実績は以下の通り。

A-① 被災者さんの聞き取り活動（活動者：うけいれ隊メンバー）

家族構成や現在の状況と必要な支援を丁寧に聞き取る活動。避難前の住居選定情報提示。

障害児や病児のいる家族には対応施設等の相談・情報提供をし、避難前にサポート体制を確立する。

活動実績：

支援している家族総数：312家族（860名）うち、7月以降の新規聞き取り家族数は34家族

B-① コーディネーター活動（活動者：うけいれ隊メンバー）

1名のコーディネーター避難者宅を訪問し、必要があれば他の生活支援相談のつなぎ役として活動する。（子育てに悩みがある、良い病院を知りたい、就職先を探しているなど）必要に応じて、専門家や他の施設を紹介する。生活のつなぎ役としての活動。

実績：10名のコーディネーターが活動。ほぼすべての支援家族宅を訪問し、神経科クリニックの紹介・カウンセラーの訪問依頼などは10家族以上。電話・訪問などによる相談継続家族数は多数。

(交流・相談)

実施日	12月24日
実施場所	札幌市市民活動プラザ星園1階 交流スペース
参加者数	62名(内避難者41名)
活動目的	避難生活で2度目のお正月を迎える子供達と一緒に、伝統的な「餅つき」を行い日本人としての「文化的絆」の再生と「あなたたちは孤立していない」とのメッセージとする。
活動内容	北海道産のもち米を使用し、子供たちにもち米がどのような工程でお餅になるのかを学んでもらい、一緒に杵を振るうことで日本の文化を体感してもらうこととなった。 元気な高齢者が多数参加し、伝統的な餅つき技術を伝承することとなった。

## 2. 事業成果

### (1) 成果

農業研修においては、就農希望を持つ避難者にとってはタイプの異なる農園での研修で、これから進むべき農業を考えるヒントとなったのではないかと。経営者から経営のポイントとなるアドバイスも聞くことができ具体的なイメージを持つことが出来た。

就農相談は、具体的には2家族の相談を受け、就農地の選考を行っている。

生活相談事業は、「うけいれ隊」のメンバーにより生活に寄り添う懇切な対応が行われ実質的な成果を上げている。個別相談は基本的にマンツーマンでいつも同じ人が相談にのることで個別課題に深く入り込み、安心・安全な気持ちを持つことができ解決へと導くものである。

「餅つき」イベントは、母子避難者が多い中でとても好評であった。子供がイキイキと杵を使い、餅のできるまで高齢者の指導で頑張っていた。避難者と札幌在住者との垣根を取り払う一体感を醸し出すものであった。

### (2) 問題点・課題

農業に限らず避難者の就業は困難が多くある。なにより、いつ帰るのかあるいは帰らないのかの基本的な選択ができないためである。もとより、このことは避難者の責任に帰されることではないだろう。迷いながらも農業に希望を求めようとする人は多く存在する。昨年の夏から秋に北海道の全避難者アンケートが行われた。その中で希望職種として農業は第4位で、約10%の方が希望している。これらの希望者が、本当に農業に就くまでは技術研修や資金の確保など多くの課題がある。

生活相談は、避難生活が続く限り当面はなくなることはない。不安定な生活を余儀なくされているため一般人よりも多くのストレスがかかっている。年月が経過する中で「自分たちはわがままなのではないか」「社会から忘れられるのではないか」等の不安がつきまとっているようだ。

### (3) 今後の展望

上記の課題にどのように対処するのかを、「避難生活」が続く以上は無くならない課題ではないか。

徐々に地元へ戻る人がでてくるであろうが、避難者の相当数が北海道に移住することになると考えられる。本格的な就労支援・生活支援はこれからは本番となる。

北海道農業も後継者不足は深刻な状態である。農業への就業は、困難性はあるが粘り強く取り組むことで実現性のある方向と考えられる。